

## 七、まとめに代えて

安 世舟

以上でシンポジウムを終えますが、その前に、私から今日のシンポジウムを手短にまとめさせていただきますと思います。

二十一世紀はアジアの時代といわれています。また、アジア太平洋時代ともいわれています。現在、カナダでA P E Cが開かれています。そこには中国、東南アジアの各国の首相や指導者と同時に、日本、アメリカ、カナダ、そしてロシアの指導者も加わっております。このことから分かるように、香港返還後の中国と東南アジアをめぐる国際関係を考える場合、最も重要なのは、その陰の主役として日本とアメリカが控えているという事実を考えなくてはならないということだと思います。

そうした与件を考慮した上で、今日のシンポジウムをまとめさせていただきますと、香港返還とは中国がこの百五十年間、欧米列強の植民地化の対象となって、その間、民族の自由を奪われていたが、中華人民共和国の成立と発展によって、つまり近藤先生のお言葉を借りて申しますと、孫文の三民主義の内の民族主義が実現されたことの象徴と解釈されます。中国の場合、この民族主義は実は、社会主義革命という方法で実現された点に大きな特徴があります。その結果、民族主義は、非常にイデオロギーが優先する形で展開され、それが現在も続いているとみられます。したがって、毛沢東によって一九四九年に中華人民共和国成立以後、今日まで中国の政治の変遷はこれと対応して、当然、その周辺の国、とりわけ東南アジアの国々において、中国に対する認識は、いわゆる脅威論として現れて来ております。とりわけ、百五十年前のその領土の一部を失った屈辱感にとらわれて、田中先生の御指摘にもありますように、

国際政治を十九世紀の帝国主義時代特有のパワー・ポリティックスの観点から捉え、関係する大国や周辺諸国に対してもパワー・ポリティックス的手法で対応している面が強く感じられます。中国脅威論は当然、太田先生が見事に分析して下さった香港返還までの中国の政治の変化と連関して、多様な形で変化しております。その多様な変化の様相を、田中先生が見事に分析して下さいました。両先生の基調講演に対して、近藤先生から、思想的な面からアプローチしていただきまして、皆さんもこの二十一世紀のアジアの政治を通観するにあたって、基本的な示唆を与えていたのだのではないかと思います。さらに、フロアからの質問も、とりわけアジアから来た留学生の問題提起はわれわれの気付かぬ点に注意を向けさせてくれて有益でした。また黒柳先生のご指摘の通り、これからアジアの二十一世紀の新しい国際秩序を築くには、平和以外にはないと思います。その平和を確立する一番いい方法は、信頼醸成、お互いの認識のギャップといえますか、そういうものをなくしていくことだと思います。したがって、今日のシンポジウムで取り上げられた、いわゆる中国脅威論、つまり香港返還後の中国が否応なしに国際政治の中で巨大な大国としての存在感、つまりプレゼンスを示していること、それに対して、東南アジアだけでなく日本でも中国の脅威論を唱える方も非常に多くなっている実状があります。我々はこうした実状を客観的に認識して、日本の側においても、中国に対する認識のギャップをなくして、それと同時に、中国側におきましても日本やその周辺の国々に対する中国認識、あるいは、各々の国の中国に対するその受け止め方を、いろいろな面において正しく受けとめてもらって、関係諸国間の相互の認識のギャップをなくしていくと、それが、信頼醸成の第一の歩ではないかと思えます。

今日の我々のシンポジウムも、そのひとつの手掛かりともなれば、わが研究所とりわけ「アジア・太平洋地域の国際比較政治研究班」としてもこれにすぐる喜びはないと思います。四時間にわたりまして、皆さまよく静聴して下さいました。有難うございます。これをもちまして第六回国際比較政治研究所のシンポジウムを閉会いたします。どう

も有難うございました。